

城下の歴史資産をつなぐ 片平まちなかグリーンフットパスの計画研究

プロジェクト代表者：大 沼 正 寛¹⁾

プロジェクト参加者：小 杉 学²⁾・榎 原 進³⁾

プロジェクト連携先：片平地区まちづくり会（今野均会長／仙台市青
葉区・片平地区連合町内会）
青葉区まちづくり推進課 ほか

A Practical Study on the Landscape Planning concerning the Sights Footpath in the KATAHIRA Residential District around the SENDAI Castle Town and the Historic Properties

Abstract

The general process of community development and common space planning by residents in the KATAHIRA District, and one specific key idea, the "Sights Footpath," are described in this report. At first, residents and their friends made a common vegetable garden on a public vacant site originally intended for city road construction. At the same time, they edited the book of local history and current daily lives by themselves; about 230 dwellers. Subsequently, they established a self-planning and development association in addition to the normal neighborhood association. Recently, they have discussed such topics as disaster recovery public housing and the baby nursery center to be built in this area. They have especially been discussing the Sights Footpath, and how this project might create connections between the current residents and new comers, as well as between the common life-landscape and the natural or historic landscapes.

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

多様に展開する現代成熟都市のあるべき姿を探るとき、インフラストラクチャに代表される近代文明的な画一的方法論によって満たされるものは限定的である。むしろ、唯一無二の場所性をつくり育てる「部分」から出発しながら、防災や環境負荷低減といった「全体」を統合・形成する環境デザインの実践と理論がいま、求められている。

仙台市青葉区片平地区≡片平丁小学校区は、広瀬川を臨み、自然が豊かで、中心市街からのアクセスも良く、人気の高い住宅地の一つである。仙台城址・瑞鳳殿とともに、古くは様々な家格の武士・足軽層の住宅が配されたところで、様々な歴史資産に富んでいる。2007-09年に現代郷土誌「片平地区平成風土記」を編さんした頃から、住民によるまちづ

1) 東北工業大学 ライフデザイン学部 安全安心生活デザイン学科 准教授

2) 東北工業大学 ライフデザイン学部 安全安心生活デザイン学科 准教授

3) 特定非営利法人都市デザインワークス代表理事・東北工業大学 ライフデザイン学部 安全安心生活デザイン学科 非常勤講師

くり組織が立ち上げられ、中心に片平地区社会福祉協議会、片平学区民体育振興会、片平丁小学校、PTA、老人クラブなど他の多くの組織を巻き込んで「片平地区個性ある地域づくり計画策定委員会」として発足させた。以来、防災を含めた総合的なテーマで仙台市・青葉区ら行政とも協議を重ねてきており、住民主導・官民協働の好例となっている¹⁾。

これらの中心に居るのが、片平地区まちづくり会会長今野均氏らであり、地区内外の様々な人材が参画してきた。本稿では、片平地区南西部にあたる花壇・大手町地区²⁾ および霊屋下地区における活動を中心におきつつ、地区全体の動きを紹介する。すなわち、2006年頃から継続している都市計画道路未利用地を活用した共同菜園や環境づくり、これに続く上述の片平地区平成風土記とまちづくり組織の成立、2013年度より計画・建設がすすむ復興公営住宅を念頭においたコミュニティづくり、2014年度の保育所建設などである。

本研究の代表者大沼は、花壇・大手町地区に居住する建築家・研究者・大学教育者として、2006年頃より、上記平成風土記や菜園づくりをはじめ地区周辺のまちづくりに参画してきた。また、片平地区全体における官民協働の課題が増加した2009年頃からは、都市デザインを専門とする共著の榊原が全体調整で手腕を発揮、さらに、復興公営住宅建設がはじまる2012年頃からは、集住計画を専門とする共著の小杉が霊屋下町内会において議論を活性化させ、公営住宅に新たに居住する人々を受け入れる体制を整えつつある。

本研究は、片平地区一主に花壇・大手町地区および霊屋下地区一におけるまちづくり活動のプロセスを踏まえながら、2つの地区を結びつつ周辺へ広がる歩行空間「片平まちなかグリーンフットパス」の計画概要と検討経過を報じ、その最適解を考えるものである。

1.2. 片平地区の概要

青葉区の人口は約30万人、そのうちおよそ1万人が居住する片平地区は、商業中心部にも近く、現在は高等裁判所、消防署、片平丁小学校および東北大学片平キャンパスを囲む文教地区の一つである。学区域は6エリアに区分され、その南西部を蛇行する広瀬川が東進する。このうち、上町段丘³⁾にあり中心部に近いのが西より大広会(片平)、柳町、北目町の3地区、中町段丘^{3再)}にあるのが花壇・大手町、米ヶ袋の2地区、広瀬川右岸にあるのが霊屋下地区である(図1・表1)。各々は立地・地形・気質とも個性豊かで、かつては6地区が運動会で対抗していたが、少子化のなか子どもを主役にすべきとの意見から、いわゆる小学校主体の運動会の形式に改まった。公共施設としては他に片平市民センターがあり、教育・文化・交流そして防災の拠点となっている。

表1 片平地区を構成する6地区と小字および人口概数

小地区名	人口概数	小字名と備考
花壇・大手町	1,800	大手町, 花壇の全域
霊屋下	1,300	霊屋下の全域
大広会(片平)	1,500	片平1丁目,2丁目の全域および大町1丁目,2丁目の一部(大町両町の大半は立町小)
柳町	1,000	一番町1丁目, 2丁目の一部(一番町1丁目, 2丁目の他方は東二番丁小など)
北目町	1,000	北目町の全域
米ヶ袋	3,000	米ヶ袋1丁目, 2丁目, 3丁目の全域
片平地区 計	9,600	※仙台市HP公表データ(小字別人口)2014より加工作成したため学区境での実数は不明

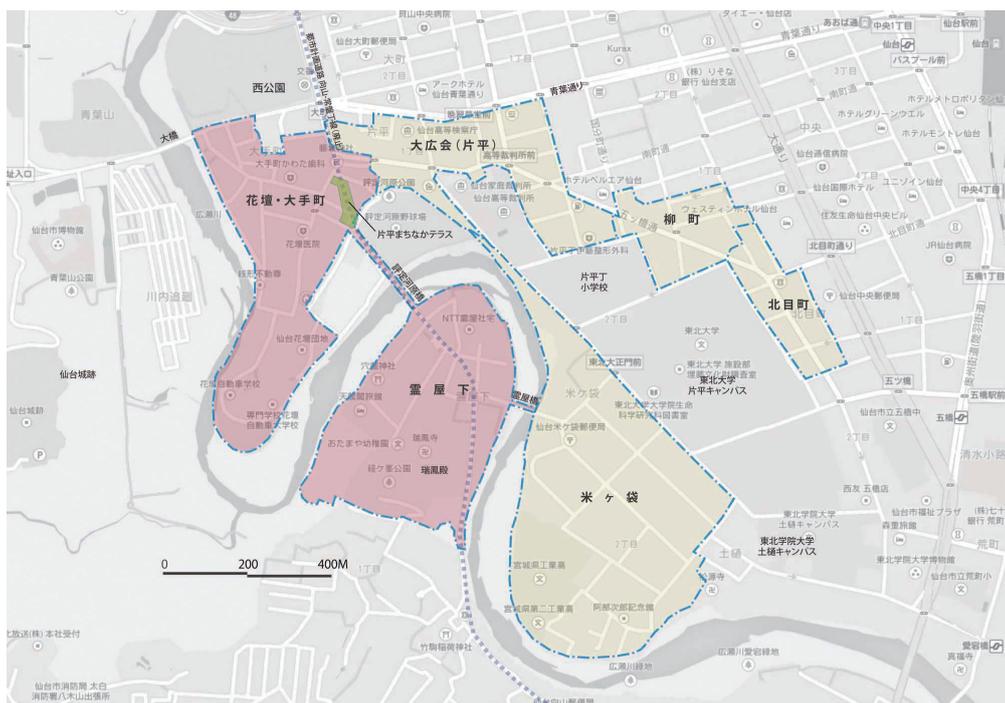


図1 片平地区（居住域）および花壇大手町・霊屋下地区の概略マップ

2. 本研究までの道のり：仙台市青葉区片平地区におけるまちづくり活動プロセス

2.1. プロセス1：まちなか農園藤坂と多世代交流，2007—現在

昨今の深刻な食糧問題とともに、各地で市民レベルでの農や食に関わる取組みに対する関心が高まってきている。仙台市においても、震災以前から、農や食に関わる様々な団体が活躍していた。市民農園などを利用して「農に参加する」プログラムや、産直市のように「安全な食を確保する」プログラムは、その代表例といえる。

市民農園といえば、海外ではドイツのクラインガルテン（写真1）、デンマークのコロニーハーフェン、イギリスのアロットメントガーデン、ロシアのダーチャなどが有名であるし、国内とくに東北では、古来の半農的な住まい（写真2）や近郊の田園地帯、それを取込んだラーバン地域など、類似性ある緑の空間がある。しかし、農的側面を取り入れた都市型現代生活スタイルが我が国で確立・一般化しているとは言い難い。

こうしたなか、仙台都市総合研究機構（SURF）らが2005年に創始した「杜の都に田園資源を活かす研究および一連の実践的研究」は注目に値する。通勤者が行き交う仙台駅前の区画整理用地を一時利用して「駅東アーバンスコップ」なる畑地（約200m²）を創出し、市民が農や食への関心を高めるのに寄与しつつ、官民協働によるまちづくりのきっかけを探った（写真3）。続く2007年は、SURFが時の政治によって閉鎖となった後も、仙台市の細田洋子、市民研究員の鈴木南枝・柳谷理紗、宮城大学の田代久美、建築家の脇坂圭一（いずれも肩書は当時）、作庭家の上原啓五の各氏らが、「アーバンスコップ倶楽部」を設立して実践研究を続け、花壇・大手町「まちなか農園藤坂」の胎動につながった⁴⁾。

この頃、上述の今野均会長は花壇大手町町内会長^{1再)}を務めていて、上記の取組みを耳にした。片平地区の西部に位置し、広瀬川対岸は仙台城および追廻地区という風光豊かな立地にある同地区であるが、1966年、これを縦断する都市計画道路向山—常盤丁線が計画される。だが、1997年から始まった用地買収は大手町から霊屋下地区まででストップし、

その後は道路建設も進まず塩漬けとなっていた。そればかりか、後年事業化された近隣の地下鉄東西線建設事業の資材置場となる懸念も出てきていた。つまり今野会長は、塩漬けの土地をアール・スコップのように活かすことで、危険な資材置場ではなく地域の交流広場に再生できないか、と考えたのである⁵⁾。

今野会長、片平地区の太田尚吾、二口和弘の各氏らと、上述の倶楽部メンバーおよび筆者らが意気投合してから、その動きは早かった。実はこれに先立ち、町内会は「花壇・大手町地区グランドデザイン作成委員会」なる検討組織を立ち上げ、補助事業を活用してポケットパーク（花畑）の設置や空地利用を実現していた（写真4、2005）。菜園づくりが計画されてからは、上記委員会内に「まちなか農園分科会」を設置し、上記倶楽部メンバーによる助言体制を整えた（委員約20名）。そして企画を具体化しながら、さらに周辺住民や福祉団体等の協力者が集うようになり、小牛田農林高校（佐々木修規校長：当時）や東北文化学園大学・東北福祉大学の学生らが協力して、土地整備、土入れ、区画割りをすすめる（写真5.6）、共同菜園が完成した。この第1期まちなか農園（2007-2009）は、利用者区分として町内会管理地、小学校管理地、個人管理地の3ゾーンを設けた。670m²の小菜園ながら、道路用地という空白地帯に、県内農業高校・農業実践大学校（草花の植樹と交流市の開催）、桃生町農家の故・佐藤富一郎氏、山形県朝日町（農園指導・イベント協力）、仙台リバーズネット・梅田川（天水桶設置）、アイサポート仙台（視覚障害者の農園活用）などが集まり、管理や活用のネットワークはさらに広がっていった（写真7、図2、3）^{6) 7)}。



写真1 ドイツのクラインガルテン



写真2 岩手金ケ崎の半農侍住宅



写真3 駅東アール・スコップ



写真4 大手町ポケットパーク 2005



写真5 第1期農園づくり 2007



図2 第1期活動報告書



図3 農園ニュース



写真6 第1期農園づくり全景



写真7 第1期農園の鳥瞰撮影

第2期まちなか農園（2009-2014）は、この活動へのニーズの高まりの一方、主に地権者の住環境整備や周辺環境整備の要請から成立した。すなわち、道路用地として確保された土地ながら、道路として成立する見込みが立たないあいだ、接道しない土地が生じていたのである。そこで問題解消のために道路を引込むと同時に、周辺で崩落危険があった石垣類を撤去する工事が同時に行われることとなった。このとき筆者は、発生した1000個超の間知石を廃棄せず、新たな菜園づくりに活用させてほしいと提案し基本計画図を描いた。やはり多くの支援者が集い、官民協働で新たな菜園空間が形成された。不整形余白を植栽に活かす平行四辺形の区画（写真8）、雨水利用のための天水桶（写真9）、日除け対策・談話場所としてのパーゴラ、看板と石畳など、いずれも専門家の助言協力があって実現したものである。筆者はこれに続き、東北文化学園大学の学生と「収納板塀」の製作を進め、農具や肥料の置場となる仮設工作物を設置した（写真10, 2011）。

震災後もまちなか農園分科会の活動は続き、畑開き、草取り、収穫といった農業的サイクルが、この小さな畑と周辺環境にも宿っている。筆者はかつて、旧仙台藩の武家地である岩手県金ケ崎町城内諏訪小路伝統的建造物群保存地区の住環境保全調査において、半土半農ともいべき維持管理を丹念に続けているさまを見て、愛着をもって緑に触れながら（活用）、同時に緑の状態を維持する（管理）、いわゆる「活用管理」なる概念をあてた⁸⁾。ここではまさに、畑と周辺環境の緑に対して「活用管理」を行うことで、多世代／地域内外の交流が生み出されている。これを土地所有者である仙台市からみれば、維持管理コストを下げるという公益性がある。また筆者を含む協力者や大学関係者から見れば、地域生活や緑の扱いから多世代共助や古老の昔話まで、学びの宝庫である魅力がある。ここに集う若い世代も、最も継続して助力している東北福祉大学のこどもサークル「セツルメント」の歴代メンバーをはじめ、アートカフェ経営の関本欣哉、都市デザインワークスの豊嶋純一、前掲・仙台市の柳谷理紗、宮城県の大平啓太の各氏ほか、多彩である。筆者もこれまで、コミュニティ調査や保育所計画提案の学習題材として活用させて頂いている（図4）。



写真8 第2期農園風景



写真9 雨水をためる天水桶



写真10 農具等の共用収納板塀



図4 空地を活用した保育施設の提案：東北工業大学SD学科卒業研修

2.2. プロセス2：片平地区平成風土記（2007-2009）およびまち歩きマップ（2010）

まちなか農園づくりが始まった2007年頃から、青葉区内各地で進められていた現代郷土誌の編さん事業を片平地区でも並行して進めることとなった。この事業は、かねてより連合町内会で取組むことを企画してきたものであり、今野氏の前任者、那須武志元連合町内会長の肝入的事業でもあった。

この郷土誌編さんは、従来のように一部の郷土史家が知見を披瀝したものではない。上述6地区の個性を尊重し、各地区から名乗り出た精鋭、総勢230名以上に及ぶ委員および協力者によって成し遂げられた力作で、青葉区内の他の平成風土記をみても異彩を放っている。全体統括と史実の確認は、歴史家でもある当時の片平市民センター長・岡崎修子氏が手腕を発揮し、6地区からの編集素材をアレンジする上述の鈴木南枝氏、地区全体の歴史地理等を編集する筆者が、今野編集委員長のもとで編集協力にあたった。期待どおり、6地区の主題は一つとして同じものではなく、歴史を重視したもの、近代の変容を詳述したもの、戦災や平和を考究したもの、商業地のにぎわいを記録したものなど、満載の内容となっている。その一方で、広瀬川や片平丁小学校をはじめとする6地区共通のテーマが挿入されることによって、多様性と連関性に満ちた、読み応えのある郷土誌が出来上がった(図5)⁹⁾。ある古老は、戦争体験録を語り、上述のまちなか農園藤坂をみて、「食料増産のために国民学校6年時、広瀬河畔でジャガイモを植えたが、今、孫たちが同じ場所で野菜を植えていることに感銘した」と、同一空間で60年後に同じような情景が再現されたことへの文章が寄せられた。

一方、この「記憶の再現」に関連して筆者が重視したのは、このような多世代参集の好機に、より広い参加者の記憶・記録に残るような通底した試みができないか、という点であった。幸い、アイデアはあった。というのもこの頃筆者は、東京追従型都市開発の陰で次々と消えていく古建築群や風景の喪失に危機感を抱き、南町通り沿いにあった旧農中金ビル解体をきっかけとして市民団体・まち遺産ネット仙台を創設して事務局を務め、代表を務めるフリーライターの西大立目祥子氏を中核に、各地でまち歩き活動を展開していた¹⁰⁾。つまり、新旧多様な文化資産が混在した現代の都市風景こそが、その時々

録すべき環境の総体なのであって、郷土誌編さんは、郷土「史」編さんだけに没頭すべきではない、という視点を有していたのである。このため6地区の全てで有志によるまち歩き撮影会を行うことを提言し、「まちかど風景セレクション」なる選評会において、大量の風景写真から限られた紙面に載せるものを合議で選んだ（図6,7）。

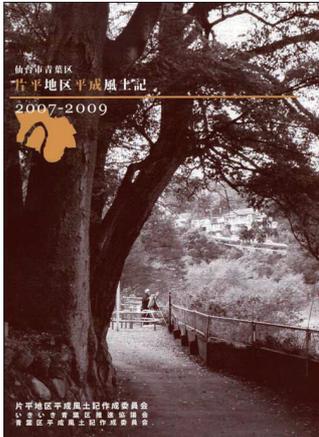


図5 片平地区平成風土記表紙

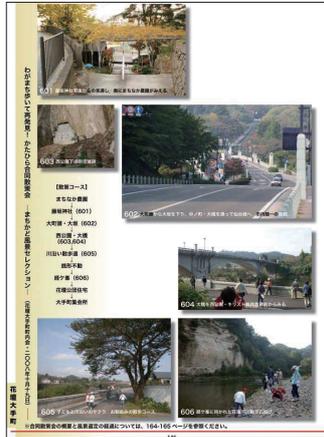


図6 花壇・大手町地区の現在風景

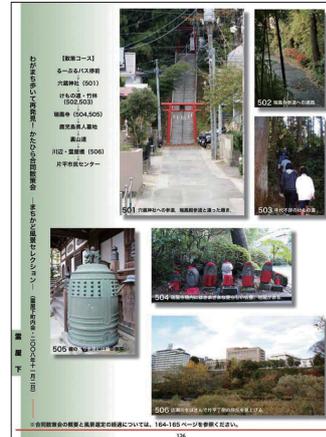


図7 霊屋下地区の現在風景

さて、平成風土記はできたものの、ここで得られた現代風景イメージはいずれも捨てるのは難しい。そこで、風土記に載せた風景を地域住民に日常的に観察してもらうため、そこから住民が推す「名所」を選び、まち歩きマップを作成することとなった。そこで、地域空間の写真をカード化し、制約ある紙面にどの場所を載せるか議論を重ねた。結果、広い片平地区を3分割し①花壇・大手町-霊屋下/②米ヶ袋/③大広会-柳町-北目町、それぞれのマップを作成した。すわなち、約20名の委員を中心として約130カ所の「大切な場所」が選出された（図8,9：紙幅の都合から①のみ掲載）。なお、このまち歩きマップは、青葉区健康福祉課も共催となっており、コース設定毎にカロリー計算までできるようになっている。どんな分野でも連携創作が可能という証左であろう。



図8 かたひらウォーキングマップ

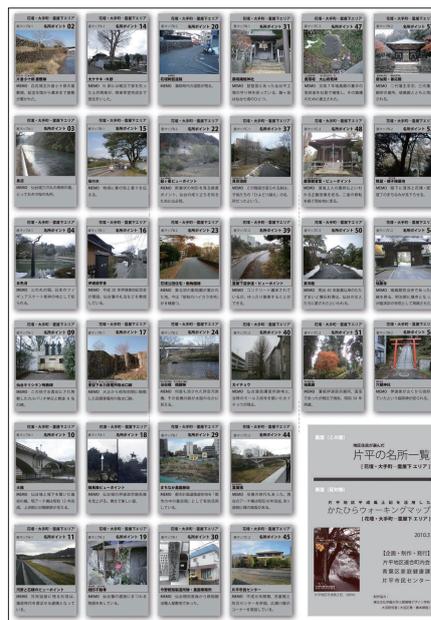


図9 片平の名所一覧

2.3. プロセス3：都市計画道路の廃止要望と片平地区まちづくり会の発足（2009－現在）

まちなか農園藤坂の舞台となった都市計画道路用地は、震災以前から市の道路整備事業のなかで優先順位が必ずしも高くないことや、地形の険しい向山方面の道路用地取得、造成に目処が立たないこともあって、実現は程遠いという空気があった。そこへ住民主体の模範的まちづくり活動が展開したことも相まって、いよいよ道路計画廃止を働きかける段階が到来した。要望書作成には筆者も協力し、関係4町内会から2月15日付けで、当時の梅原克彦市長に提出した。実際には予算の問題が最大の理由と思われるが、その後この都市計画道路は正式に事業化凍結、廃止へと進むことになった。その一方で筆者らは、道路用地を一時借用して「仮設」設置しているコミュニティ菜園が失われる懸念も抱いた。仮設空間が失われるのはやむを得ないとしても、コミュニティの拠点が失われるのは損失が大きい。より公益性をもった跡地利用の青写真を構想する必要に帰着した。

他方、こうした一連の取組みを通して、今野会長がかねてより念頭においてきた、行政への上申と下賜の事業といった「おねだり方式」ではない、官民が対等にまちの問題解決や価値向上をめざす体制をめざし、その計画策定が進められた。農園や風土記・マップのような目に見える活動を各種実践プロジェクトに位置づけながら、地区全体の安全安心をめざす、より高次の自治的取組みである。その組織・ルール整備には、長年市民と行政のあいだをつなぎながら、都市空間の価値深化を図ってきた共著・榊原ら、特定非営利法人都市デザインワークスの支援が力を発揮した。

同NPOは、都市デザイナーの故・大村虔一元東北大学教授とその門下である榊原および佐藤芳治氏らが2000年に立ち上げた組織であり、その著「せんだいセントラルパーク構想」では、まさに広瀬河畔を舞台としながら緑豊かな都市環境をめざすランドデザインが語られている¹¹⁾。しかし同時に、まちづくりの現場においては、市民の自治組織こそが主役であり、主役のいきいきとした活動の延長上に、その舞台としての構想空間が実現しなくてはならない。ランドデザインを発信した榊原らが、この地区の取組みを重視し、いわゆる専門家派遣制度で求められた役割以上に献身する背景には、その思いと意志があったのである。

このまちづくり会と同時に策定された片平地区まちづくり計画では、地区の置かれている状況を整理して出てきた魅力と課題を踏まえ、「『杜の都・仙台』を象徴するまちづくり」を基本理念に、4つの目標が掲げられている。また実践プロジェクトとして、これまで地区で取り組んできた行事や、震災を教訓にした防災の取り組み、観光も視野に入れた仙台市との協働に向けた提案など6つの事項が挙げられている。そして取り組み体制についても実行委員会形式で進めていくという大胆なものとなっており、まさに連合町内会の枠組みを越えたものとなっている（図10、表2）。



図10 まちづくり計画表紙

表2 まちづくり計画の骨子

【基本理念】	【6プロジェクト】
杜の都・仙台を象徴するまちづくり	①地域防災体制の強化
【4つの目標】	②共助体制構築
安全・安心の確保	③かたひら四季イベント開催
コミュニティの活性化	④子どもの遊び場・居場所づくり
歴史・環境の保全・活用	⑤片平まちなかテラス整備
持続可能な体制の構築	⑥片平観光ストーリー創出

本研究につよく関連するものとしては、表中⑤の片平まちなかテラス整備プロジェクト、さらに①の地域防災体制強化に関連して、霊屋下地区に建設される復興公営住宅の受入れの取組みが挙げられる。前者は、まちなか農園藤坂を含む計画道路跡地全体を「片平まちなかテラス」と位置づけ、その利活用方策を構想するものであり、本研究題目をも包含している。引き続き筆者らが提案主導しながら、まちづくり会において検討することとなった。また後者は、本計画の策定直後に東日本大震災を体験したこともあって、その後に決定した仙台市復興公営住宅の建設にかかる新住民が町内会に溶込み、コミュニティを活性化させることを企図したもので、次節の取組みにつながっていった。

このように、片平地区まちづくり会の取組みは、政策や事業内容を下達し要望を吸い上げる連合町内会のそれまでの活動から、明らかに実践的かつ住民主導的なものへと進化している。ただし、今野会長が健在なうちは安泰としても、その後の住民が引き継げるレベルにスリム化していく課題は今後浮上するかもしれない。

2.4. プロセス4：東日本大震災後の防災まちづくりと新旧コミュニティ（2011-現在）

前節のようなまちづくり組織の立ち上げ期に、あの東日本大震災が起こった。市の中心部に近い片平地区では、避難所となった片平丁小学校体育館や片平市民センターが、地区住民よりはむしろ市街地勤務の帰宅困難者や東北大留学生の対流拠点となり、統御する今野会長や当時の西辰己小学校長らは、不眠不休で調整にあたった。幸い、花壇大手町のまちなか農園付近では震災当日から、地元食堂の協力による炊出しが始まり、大きな混乱は生じなかったことになるが、実際には住民の安否確認など幾つもの懸念を抱えながら、今野会長は片平地区全体の中核を担い続けることとなった¹²⁾。

それからの復興への取組みは、紙幅の面でも、また各地へ奔走していた筆者の把握能力の面でも詳述には及ばないが、沈静化につれて今次震災の反省点が浮き彫りになり、震災直前に形成したまちづくり会のなかでも自主防災組織の確立が最重要視される気運が到来した。とくに、それまで関係町内会の動きを集約することを重視していた震災前のまちづくり会は、仙台市の中心部に立地している特性と、その動きに連動しなくてはならない特殊条件を思い知らされたことになる。自立・共助は農村計画の重要課題であるが、都市部ではより多様な人々による連携協力を形成する必要がある訳で、防災をテーマとしたまちづくり会・小学校PTA・片平市民センター・社会福祉協議会・消防署らの協議が本格化していった。2年後の2013年には、片平地区全体に働きかけながら、避難所運営や防災訓練が実施され、地区の事情に応じたマニュアルが制作されつつある。

さて、周知のように仙台市は、市内各地に復興公営住宅（国制度でいうところの災害公営住宅）を整備することとなったが、そのうち2団地が霊屋下地区の元企業社宅跡地を買収して建設されることになった。甚大な災害を被った方々にとってどのような住宅ストックが求められるのか、また社会はどのようにこれを支えるのか、議論は尽きない。ともあれ2団地は、比較的中心部に近い片平地区であることもあって、相応の希望者が応募するであろうし、その一方で福祉的観点からは、より事情が深刻な世帯に選択権を与える可能性がある。つまり受入れる霊屋下地区としては、様々な事情の異なる人々が参集する共助福祉的コミュニティをどのように形成できるのか、予め討議が求められるのである。

この重要任務に対し、主に有形資産のデザインを専門とする筆者では力及ばないことは明白であったし、地区全体の相談はおろか市内各地でも復興支援に奔走していた上述榎原にも限界があろうかと、共著の小杉に相談、集合住宅内のコミュニティ形成支援実績をも

とに霊屋下地区町内会に勉強会を設置することからはじめ、地域からの厚い信頼を得るに至っている。

例えば新たに建設される公営住宅には、集会所が設けられる。霊屋下地区の集会所は、瑞鳳殿のある経ヶ峯中腹の古社、穴蔵神社の脇にあって、場所は風情があるが参道を登るアクセスが高齢者のバリアとなる。団地新住民との良好なコミュニティが形成できれば、むしろ新たな集会所で会合をひらき、ともに環境づくりに勤しむかたちを目指したい。

そうした構想・計画は、客観的にみて意義深く理想的であるが、まちづくりの現場ではそう簡単に相互理解が得られる訳ではない。突如浮上した建設計画の認知から始まって、建物形態と日照の問題、樹木の維持管理、そもそも新住民が町内会に加入してくれる保証がないなど、不安要素は幾つも挙げられる。それらを放置して状況が進んだら問題点をぶつけるというのではなく、予め予想図と解決策を合議して、結果がどのようになろうとも合議の到達点を共有資産とし、活力あるまちづくりを目指すのが小杉流であり、実は、その目標は、地元住民の求めていたものでもあった。徐々に深化する動きに期待と安堵の気持ちをもって、同じ片平地区住民でもある筆者はみつめている。

3. 研究の主題：まちなかテラス・保育所建設とグリーンフットパス

3.1. 都市計画道路・向山-常盤丁線の跡地利用問題と片平まちなかテラス基本構想

2.3節で指摘したように、都市計画道路跡地問題は片平地区まちづくり会における重点プロジェクトの一つでもあり、諸条件を念頭において空間計画提案を行う必要があった。

改めて、まちなかテラスの立地を大きな都市骨格の中で考えれば、まずは仙台城・瑞鳳殿の直下にあたるものが挙げられる。市内きっての観光名所である2景勝地のほか、蛇行する広瀬川と断崖溪谷の地形が自然環境資産として特筆されること、また、城下の追廻地区の戦災仮設住宅群が無くなった跡に計画されている歴史公園の内容次第で広瀬川対岸にある花壇・大手町地区の様相も変わる可能性があることなど、地区住民の生活問題を越えた役割を付与される側面があることは、他地区にはない重要課題といえる。

また、仙台市の中心街路の一つ、青葉通境界の商業地・住宅地が、片平丁小学校区に編入されていることもあって、中心市街地の動きが常に関係してくるうえ、地下鉄東西線の最寄りとなる大町西公園駅ができることでいわゆる不動産価値が高まり、良くも悪くも、都市開発が盛んになることが予想される。

一方、当の花壇・大手町地区は、かつての武家地を分割した地割に建つ戸建て住宅群と、昭和後期から平成にかけて建てられた集合住宅群が混在しており、大学生ら若者がそれなりに居住する一方で、いわゆる住民票を置いた地区住民は高齢化が深刻化し始め、かつてあった商店街が無くなったことによって、買物難民が散見される状況にある。

以上を考えれば、まとまった跡地において想像される開発形態は、まずはマンション、次いで戸建て建売り住宅のミニ開発であろう。しかし、単にそうしたスプロールを助長するようでは、現地区住民の問題は解決しないうえ、むしろ現在仮設ながら確保できているコミュニティ空間は失われていく。それどころか、用地買収にやむを得ず応じたかつての所有者にとっては、宅地開発業者のために身を引いたようでもあり、しかも場合によっては中層建築が建ち日照が悪くなることも考えられ、やるせない気持ちになることは必至である。つまり一端公共用地として買い上げたこの土地には、それなりの公益性をもたせる以外、本来的な解決策には至らないのである。

長年この問題を考えてきた筆者としては、地価の高いこの土地に何らかの高度利用が求められることはあっても、基本的には公的空間のまま活用されることを主軸に検討をすべきであろうと考えていた。そして道路空間として連続した土地が得られたこと、段丘状の土地に開かれた視界-藤坂神社からのVista（目抜き）-が得られたことこそは、元所有者の方々が止むなく応じて頂いたことによる公益的価値空間であると考えようになり、計画初期より次の要点を盛り込み、コアメンバー内の協議を重ねた（図11,12）。

- ①藤坂神社から経ヶ峯方面へ向かう何らかの徒歩経路と Vista を通すこと。
- ②これまで通り四季イベントを開催し、防災拠点ともなるような広場を設けること。
- ③できることならコミュニティ菜園空間も設けること。

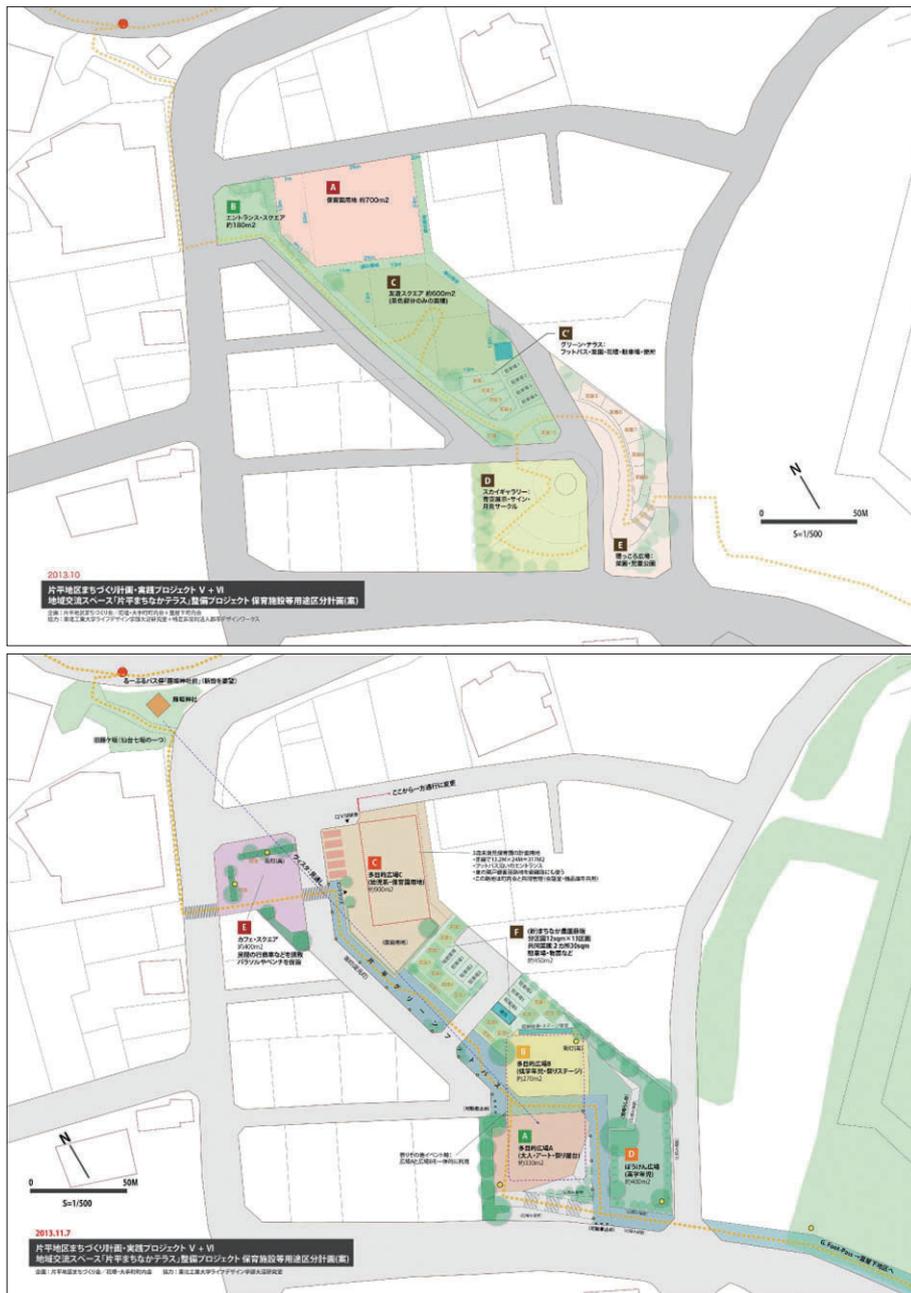


図 11,12 まちなかテラスの改良案検討図（2013.10 月版 / 2013.11 月版）

④各種施設・用地整備に必要な資金を用地売却等によって充てる場合には、全体計画をにらみ、地元住民のニーズを参照しつつ検討する。例として低層建築で済む保育所を設置する等して若年層の交流人口を増やし、にぎわいを創出することも一考である。

なお地元住民からは、④の腹案として、藤坂神社がもと伝統工芸・仙台平織の工場にあった明神社に起源をもち、織姫神社と称していることから、七夕伝承館のような施設計画も提案された。ただし対岸に仙台市博物館があること、若年層にとっての七夕が必ずしも人気の催事とはいえないため最上位案には至らなかった。ともあれ、こうした議論の経過において④で例示した保育所計画は、想定以上に実現への動きをみせることとなった。

3.2.3 3歳未満児保育所の計画と事業化

支店経済都市で流動人口の多い宮城県仙台市は、共働き世帯も多く、いわゆる待機児童解消が喫緊の課題となっている。例えば2010年の待機児童数は、仙台市で1023人、横浜市で1552人であるが、横浜は2013年、早々とゼロを達成した。

仙台においてとくに不足しているのが、いわゆる3歳未満児の保育環境である。その背景には、保育所設置基準（例：3歳未満児：保育士＝1：3、3歳以上児：保育士＝1：6）がある。このため、近隣に3歳以上の児童を預かる幼稚園等の施設が存在している地域においては、3歳未満児専用の保育所を設置することも理にかなうという状況があった。

そのようななか、前節のように地域住民の跡地利用構想に保育所設置案が出されたことによって、仙台市は、筆者らが制作した提案書のうち、まずは保育所計画から進めようという動きを一時みせた。ちなみに市としては、施設必要数が大変多いため、土地の貸与を行い民設民営で事業化されることを望む政策としており、このこともあって民間事業者が計画しやすい好立地部分を先行して整備することを企画し始めたのである。

まちづくり会としては、保育所計画もさることながら、それ以外の利活用が重要問題であった。仙台市が市有地を公益に叶う利活用に充てるのは当然である。しかし地区住民側からすれば、公的利活用のなかにも、これまで日常の維持管理から防災・復興まで、地域づくりのいわば模範例として実績を積んできた自負があり、その出発点には2.1節に述べたように菜園を含むコミュニティ空間が確保できたことが背景にあった。つまり、市当局が急ぐ待機児童問題解消の課題だけを抜き出して、地域活動プロセスを後回しにするのは、本質を欠くのである。

他方、これまでやや性急に動かしてきたまちづくり会の各種活動も、地区住民のなかでは若干偏りがあることも指摘されていた。このため2014年現在も、市の事業説明会への住民参加状況は必ずしも芳しくなく、今後とも地道に協議の場を重ねて行く必要が生じている。ともあれ、2014年夏期に募集した運営福祉法人は無事選定され、冬期には用地整備に着手、2015年夏期の開所が決定した。官民の協議と実践は、いよいよ本格化してきており、これをより開かれた状態に広げ、また内容を深める正念場が近づいている。

3.3. グリーンフットパスの計画提案

上述のもろもろの状況のなかで、グリーンフットパスの構想は浮上してきた。改めて振り返れば、片平地区平成風土記を題材にマップを制作し、そのためのまち歩きを重ねた頃から想起は始めていた。また、子どもたちによる夏祭りの神輿巡行や、紙幅の関係で本稿に含めなかった様々な活動を勘案すれば、ハード整備云々よりは既存の歩行路とそこに立ち現れる風景だけで、十分に価値を享受できる場所もあった。

しかしながら前節に示したように、都市計画道路用地ゆへの連続的な公共空間の形態的特徴が目前にあること、そして震災後にさらなる深化をみせている霊屋下地区のまちづくりと、元来の歴史資産、そして間もなく開業の地下鉄東西線の有効活用を併せ考えると、その必要性はより一層つよく公益性を帯びる。事実、最近の官民協議の場においては、本案が実現をめざす事業メニューの一つとして常に浮上しており、まずは安堵している。

こうした経過のなかで、保育所事業計画が明確化しようという2014年3月には、メディアアークにおいて開催された当学科卒業制作展の場を利用して、当時大沼研究室3年生だった学生諸氏を中心に作成した縮尺1/500の巨大な地域模型を用い、官民学の座談会を開いた（写真11、図13）。これは助成頂いた本研究のメインプログラムで、青葉区まちづくり推進課、仙台市公園課をはじめとする関係各位にも足を運んで頂き、これまでの協議内容を立体模型の中で確認すると同時に、やや先行してすすむ保育所計画のなかに地域交流の可能性がないかについても議論をすすめた。

フットパスの経路は未確定要素が多いが、一つの起点となる藤坂神社周辺から道路用地を通り、評定河原公園の一部を經由して評定河原橋の歩道へ至り、瑞鳳殿参道へと続く道を構想する。その間、ルートは曲折や高低差を乗り越えなくてはならないが、徒歩自体を愉しみとする市民・来訪者のための空間であることから、その沿道空間を具体化していくことをめざす。その際、これまで官民間の議題となっていた評定河原橋の片側歩道橋は、大規模工事とならない範囲で、改良の可能性を探る。また、このフットパスの提案においては、既存の観光バス路線「るーぶる仙台」のバス停を藤坂神社裏の段丘上部にも設け、瑞鳳殿を観光した来訪者が川辺を散策、フットパスを歩く等してから仙台城や大崎八幡方面に向かう観光プログラムについても提言を試みた。

要するに、片平まちなかグリーンフットパスとは、これまで培ってきた地区内各地のまちづくり活動の足跡を、まちなかテラスや保育所、復興公営住宅といった新たな動きと結びつける「活動をつなぐ歩行路」であり、ここに住まい、また新たに訪れる人々が行き交うことで交流を深める「人心をつなぐ歩行路」である。そして、これを俯瞰するならば、人々が織りなす生活景と、悠久なる自然・歴史環境を結ぶ「風景をつなぐ歩行路」ともいえよう。その実現化にむけて、各々の動きは有機的に関連しつつあるのである。



写真11 まちなかテラスおよびグリーンフットパスの討議風景（2014.3）

4.2. 研究の課題

本研究を通し、当該地区のまちづくり活動、とくに片平まちなかテラスとグリーンフットパスの形態は次なる状況へ向けた胎動をみせている一方で、むしろ足元である地区住民を交えた対話型創造の場をこれまで以上に設けることが課題となっている。引き続き関係各位と相互協力を重ね、杜の都に相応しい特徴あるまちづくり／環境デザインの実現に寄与できれば、と考えている。

謝辞

本研究は、多数の関係者の一員である筆者らの視点から、関係するプロジェクトを中心に小括したものであり、その全体を総括するものではありません。前史となる活動にはじまり、本文に示した諸氏、仙台市および青葉区の担当課の皆様、さらに地区内外の関係者の皆様の尽力に敬意を表しますとともに、今後ともご助言賜りますようお願い申し上げます。

註・参考文献

- 1) 2013年3月には片平地区まちづくり計画がまとまり、冊子を発行、2013年4月実践活動組織として「片平地区まちづくり会」を再生発足させている
- 2) これまでの地区および町内会の成立過程の事情から、地区名は「花壇・大手町地区」、町内会は「花壇大手町町内会」と使い分ける慣例となっている。
- 3) 仙台は広瀬川の河岸段丘上に形成された城下町である。例えば 佐藤昭典「仙台を創った川 四ツ谷用水（総集編）」南北社、2009
- 4) 鈴木南枝ほか編「都市の『農』空間創出を考える研究 仙台まちなか農園プロジェクト」仙台都市総合研究機構、2006 および 脇坂圭一・田代久美・細田洋子「都市のプラットフォームとしての中心市街地における『農』空間に関する研究：空地を利用した実験的プロジェクト『アーバンスコップ』の実践的検証 その1・その2」日本建築学会東北支部研究報告集（計画系）第70号、pp251-258, 2007
- 5) 今野氏は、花壇大手町町内会を引き受けた当時、住民・地区内施設・開発業者そして行政らとの幾つかの問題解決に苦心しており、当初は菜園作りに前向きでなかったが、助言者の熱意と実績から導入を決めたと話している。
- 6) 鈴木南枝・今野均・大沼正寛・細田洋子編「まちなか農園－まちを育てる畑－」仙台市、2008
- 7) 大沼正寛、阿部太一、細田洋子、鈴木南枝、脇坂圭一「共同菜園を活用した地域コミュニティ形成過程の参与観察－仙台・まちなか農園藤坂の事例から－」日本建築学会住宅系研究報告会論文集第3号pp81-86, 2008
- 8) 大沼正寛・石川慎治・藤倉賢一「住的環境資産の活用管理実践－伝建地区におけるヒバ刈りワークショップを中心に」日本建築学会大会農村計画委員会研究協議会資料、pp85-88, 2003
- 9) 片平地区平成風土記作成委員会（関連3団体および230名以上の住民ら／全体編集協力：岡崎修子・鈴木南枝・今野均・大沼正寛）「片平地区平成風土記」2009
- 10) まち遺産ネット仙台（西大立目祥子代表）「三角屋根のあったまち」2009 ほか
- 11) 特定非営利法人都市デザインワークス「都市デザインガイドブック せんだいセントラルパーク2006」2006
- 12) <http://www.ssvv.ne.jp/wp-content/uploads/2011/04/377ce2cd180cd0549da3323636598b3f.pdf>